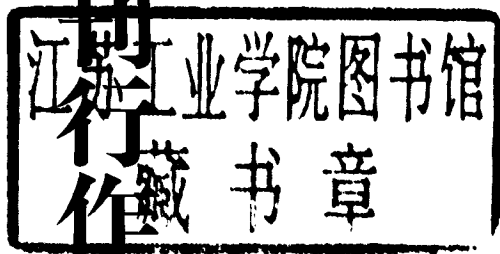


奥野健男
室生朝子
星野晃一
編

室生犀星未刊
行作品集

第六卷



三
弥
井
書
店

室生犀星未刊行作品集 第六卷

定価七八〇〇円
(本体七五七三円)

平成二年十一月五日 第一刷発行

著 者 室 生 犀 星

発 行 者 吉 田 榮 治

発 行 所 株式会社 三 弥 井 書 店

〒一〇八 東京都港区三田三一二三九
電話 東京〇三〇四五二一八〇六九

振替 東京 九一二一二三五
組版 鶴凸版印刷

乱丁・落丁本はお取管えいたします

ISBN 4-8382-5006-1 C 3391 P 7800 E

目

次

宿なしまり子	7
五つの瞳	25
繪日傘	62
愁ふるなかれ	71
光つた唾	87
しづ子覺書	89
びあのの街	110
手を拜む	124
片羽の蝶	133
裾野	149
暗い卵	163
虐艶録	178
マヤ記	190
變りかける	204
厭壽	213

方舟	225
病蟹	238
くさ鏡	250
愛情業者	264
人間荒野	281
小説の不倖	299
四つの命	310
かなしみの橋	326
つめたい日記	338
晴れ間の人	350
神	362
釣れない人	382
生涯の詩集	386
切なき思い	402
一人は賣れ一人は賣れない話	415

綾女	429
解題	437
解説	450

室生犀星未刊行作品集

昭和Ⅳ
(昭和25年3月～昭和33年5月)

宿なしまり子

宿なしまり子といふのだから、宿はないはずなのに、ぬくぬくと顔いろのあをくなるまで寝てゐた。隣のドアがしきりなしに開け閉てされてゐて、どうやら産氣づいたらしい、人の出這入りがふえ、産婆が來てゐるらしいのである。跛のくせに赤ん坊を生んでどうする氣か、まり子はゆうべ加壽子から階下の管理人を呼んでくれと言はれたが、呼んだふりをしてすぐ寝て了つたのである。それが今朝になつて産氣づいたのだから氣になつたが、そんな他人のことはどうだつていいといふ氣になつた。あんな跛女を對手に騙かした男も男なら、股の付根から切斷された足をどんなふうにして、男に觸らすまいと一本しかない足を苦心苦面をして、ずらしたり廻したりしてゐたかと、まり子はくちびるをまけて笑つて見た。結構女といふやつにはすたりがないと、まり子はねぎめの蒼褪め切つた顔をたちまち輪に吹いた煙草のけむりにうづめた。隣で陣痛のうめきゑがした時分、まり子は起

きて出たが隣室の森田には顔も出さなかつた。顔を出したらそのまま汚ない手傳ひを遣らされるに決つてゐるから、早く足を抜いでしまひたかつた。

頬べたをもんでゐると、すぐ裏の袋小路になつてゐる物干場に出てまた寒いのにハモニカを吹き出した。職工はたしかに職工だが去年の夏からずつと吹きつけ、そしてまり子の化粧時間をねらつては覗き込むのだ、もう何度か裸體のすがたを見られてしまつてゐた。何度か見られたので平氣になつてゐたが、硝子戸が隙間開きしてゐると、手きびしくしめ切つてやつても、そんなことでひるむやうな男ではない、なほ調子をたかめるくらゐだ。まり子はすり硝子になつてゐる戸の一番上の一枚分から、向ふの物干場からななめに部屋の様子が見られる位置になつてゐて、そこから櫟のやうな男の顔がハモニカを鳴らしながら覗いてゐた。まり子はお隣で赤ん坊がうまれるのよ、うめき聲があんたにだつて分るはずぢやないの、ハモニカなんか止すがいいわ、ばかばかしい、まり子はわざと硝子戸をほそめに開けて、ひねるやうな聲をつぶして言つた。ハモニカは利目があつて駄んだ。これで森田もらくに生めるだらうとまり子は同じ洋裁仕事を共同でやつてゐる豆腐のやうにぶよぶよした男の顔を目にし

た。どんな赤ん坊が生れたつてこつちの知つてゐることぢやない、と、まり子は部屋を出て行つた。玄關で管理人のお内儀さんが、まあお出掛けとあきれたふうで言つた。何故？ 出掛けるのが悪いんですか。だつて森田さんちや赤ちゃんが生れるんだつていつてゐるのに、お隣のあなたが少しも手づたつてあげないなんて、女ぢやないみたいですよ。まり子は靴にくつぺらを當てがひながらいつた、女だからつて一々赤ん坊を生む手づたひをしてゐたら、世界ぢゆうの赤ん坊の間を駆け廻り廻らなければならぬわ、いやなこつた、男の唾の後始末なんか眞平ご免だわ。――まり子はお内儀さんの顔も見ないで表に出た。そのはづみに物干場にゐた男がすれちがひに袋小路から出て来て、無理にしたしみをなすり付けるやうにいつた、森田さんで赤ん坊がうまれるんだつてね。しかしまり子は口をきかずにちよつと顔を見て、そのまゝ大通りに出て行つた。自分が出掛けるのを待ちまうけて、用もないのに何か言ひがかりをつけるのだ。まり子はどこにあんな小僧に見せてゐるすきまがあるのかと、朝の化粧をすき見される手ぬかりが感じられた。永い間おなじ女のなまみを覗いてゐたら、あんな氣らくさで物言ひをされるものだつまり子はどこからどこまで見られ

たか分らない自分に、うすぎたない眼付がにちやついてゐるのをバスにゆられてゐる間ぢゆう、頭にうかべた。

それではわたくしお宅の方にうかがふことにしませうか知ら、まり子はせいの倭いおばあさんじみた女事務員と永い間口なぞ利くものと睨みあつたが、實際自宅に出掛けて埒を明けるより外はなかつた。けふはきつといらつしやることになつてゐます、わたくしも朝からずつと待つてゐるんですもの。では事務の方をやつていらつしやらないんですか。ええ、正式な事務員ではございませんけれど、鍵だけ預つてゐますの、川村さんは何も彼もお一人でやつていらつしやるものですから、何處からどういふふうにお金がいゐるかも分りません、ほとんど一日ぢゆう飛び廻つていらしつてゐてこの事務室にいらつしやる時間なんか、さうですね、一時間くらゐなものでせうか知ら？ ではあなたはお留守をしていらつしやるんですか、とまり子はこのちんちくりんの、どんな逆境に置いてもそのまゝちつと耐へてゐるやうな女をづけづけと見入つた。ちよつと出掛けるからあなたのお暇があるならゐて頂戴、誰かが來たら用件を聞いて置いて下さいといつた調子で、もう出かけておしまひになるんです

もの、どう仕様もないんです。では月給のやうなもの
は？ と、まり子はこんな正直くさい女はやはりこんな
處に、否應なしにこき使はれてゐなければならぬやう
に出来てゐると、見下げ果てたつべたい聞きたくもない
やうな調子でいつた。たまに千圓もくださればいい方、
何時でも半端なお金を此方から申し出なければおはらひ
にならないんです。するとわたくしのけふいただくもの
なんか問題ではないのね。まり子は手さげの中から出し
かけた料理の原稿をもとに返して、パチンと口がねをし
めた。ちんちくりんの女事務員はやつと柏谷はるといふ
名刺を出して、あなたの原稿は是非いただいて置くやう
にといつていらしたんですが、お金は夕方にさし上げ
るとさういつていらしたんです、川村さんだつてあな
たの原稿がないとお困りになるに決つてゐますから、け
ふはきつといらつしやいますわ。まり子は息もつかずに
いつた、さうでせうき、わたくしに書かせて置いてそれ
を勝手な名前をつけて又賣りなされるのはいが、此方に
まはるお金は來ないんですもの、まるで乳ばかりしほら
れてゐる山羊みたいだわ。まり子は彼女が立つた後です
でに名前のある柏谷はるのらしい原稿の一綴りをじろり
と卓上に見入つた。そして卓上に近づくとほとんど無關

心なふうで、原稿をばらばらとひらひ読みをした。やは
り料理と裁縫をあつかつた原稿だつた。
(おひたしもの 水仙、するせんはおひたしには花だけ
にいたします。)

まり子はちよつときふには意味がとりにくく、再度小
ぢんまりした原稿をよみなほした。(するせんはおひた
しには花だけにいたします。)まり子は卓上をはなれて
窓の外の日のあたたつたビルの街區を見に立つた。ビルの
街はするせんのやうな黄いろいしべのやうな建物をそろ
へてゐます……まり子は輕蔑しきつた胸のうちにさう焼
きなほしをして見たが、それとは反對にまり子の顔は變
にあらたまつたものに、かはつてゐた。ちんちくりんは
あんなくだらない原稿をかくのにも、類を絶した名文句
をならべてゐる。彼女は輕蔑しやうもないものにせめが
れ、柏谷が小用からもどつて來たときには、むしろ、ち
よつと言ふことがなくなつて、だまつてゐた。

晝には柏谷はパンをかじり出した。まり子は食事の用
意がなく、といつて外に出て済ませることも出来ない。
柏谷がおひとつかがといひ、石ころのやうなパンを頷
けようとしたが、まり子は手も出さなかつた。このまま
川村を夕方まで待つといふことも、時間のうへから大變

だが、埒をあげなければならぬものは、開けずにかへれなかつた。柏谷は無理にまり子に一個のパンをうけとらせた。まり子は不味さうにかじり、かじりおはるといった、お茶はございませんの。柏谷は呑まれたふうで氣がつかかなかつたと言ひ、お茶をつくりドアの外に出た。まり子は手にのこつたパンを何度もためらつて見たが、つひに紙屑籠にそつと投げ入れた。彼女は朝から何も食べてはゐない、食べてゐるひまもない、それでゐながらパンを捨てる、まり子自身でそのきもちの正體をつかまへようとしたら、やつとあの水仙の一行を讀んだ妙な反響がさうさせたものらしかつた。あんな、ちんちくりんのおばあさんにも、あんなに頭のこまかい働きがある、しかし女学生の作文めいてゐるぢやないかと、たかを括つてひと思ひに輕蔑してしまつた。柏谷がお茶を持つて來てくれたのに、さすがのまり子もその好人物といふのか、さういふ下世話になれてゐる女なのか、それらにこたはつてゐないふうをしてゐるのに、ちよつと打たれた。あなたは原稿の下書きばかりしていらつしやるんですか、いまはお拂ひも悪い時世ですからたいへんでせうねと彼女は自分に引きくらべるやうにいつたが、まり子は判然とした返事をしなかつた。安井のちいさんが今夜來る

はずになつてゐるが、金の方が危ない氣がするから待たせて置いても構はないと、なぜかちいさんの手をからだに感じた。ちいさんの手は毎時も膝の上からあがつて來る、一本の手ではない、たくさん子分の手をつれてあがつて來てゐた。紙問屋の間を取引してゐた安井も終戦後三年ばかりは上景氣だつたが、このごろ來ても何時も鏡臺の上に置く紙入れは、ひしやげてゐた。まり子は股のあひだにはさまるちいさんの手を、いつも、ひよんな時に感じ出した。對手が柏谷のやうな溫良しい女の場合にかぎつてゐる、これは何のせゐだ、まり子は讀みながらゐて讀んでゐなかつた雑誌を卓上に投げ出した。

川村芳子が事務室にもどつて來た夕方には、まり子はしびれを切らしてゐたものの、川村芳子はちよつとまり子を見たきりすぐ投書の郵便物に目をとほしはじめた。柏谷ともろくに口をきかない、まるで誰もゐはせてゐない事務室にゐるとおなじ振舞だつた。柏谷はそばで封筒を裂いて中身を揃へ、それを川村の手の上に置いた。すぢ張つた手にあぶらが切れ、寒いそそけた股風がまり子のえり脚に來た。突然、川村は投書の間から眼をあげて言つた。ええと、あなたは砂原さんでしたね、何の用事でしたつくと、ちよつと柏谷の顔を見て柏谷の言ふこ

とをうながした。おひる前から原稿を持つてずつとお待ちになつていらつしやるんですと、柏谷はお原稿をどうぞといった。まり子は原稿を柏谷に渡し、柏谷はそれを川村に手渡ししたが、川村はそのままひろげもしないで投書の上に置いた。そして枚数はどれくらゐですかと、やつと原稿を手にとつてしらべ、枚数はお約束よりか多いやうですと、きちんとした、まるでうごかない一重臉が此方向きになつた。枚數に制限がないといふおはなしだつたものでございますからと、まり子の眼もやつぱりすわつたままで少しのたちろぎも見せなかつた。再び川村は投書を引繰り返してよみふけり、柏谷は讀んだ既濟の分をべつに折つてかさねた。それがかなり永い間くり返され、すでに向うビルでは鑑戸を下ろしはじめたくらゐだつた。けふ原稿料をいただきたいのですが、それで、ずつとお待ちしてゐたのですけれど、まり子はこんなかさかさした女にも、追ひつめる男があるものだらうかと、骨の出てる硬い鼻すちを見つめた。川村は顔をあげると豫期してゐたことのやうに、すらすらといった、原稿料はけふはおはらひ出来ません、まだまだ大きい仕事に拂う金がたまつてゐるものですからお氣の毒ですけれども、けふは出来ません。彼女はいふだけいふと

また書類に眼をそそいだ。では、何時おうかがひしたらいいのでせう。さうね、月末にといふことにして置けばまちがひありませんね。川村はまたまり子から眼を放して投書を見入つた。まり子では失禮といつてドアの外に出ると、柏谷がすぐ後を追つて出て來た。わたくしからさういつてもつとお早くに拂ふやうにしますから今朝からお待ちになつたの、がまんさるといいわ、と年上の女らしくなだめた。まり子はいつた、いやな方ね、碌に原稿も見ないなんて、廣告ばかり取つて歩いてゐるとあんな女になつてしまふと、まり子は柏谷にちよつと頭を下けたきり、卒氣なくわかれた。あんな女社長にとりついてゐたら、仕事ばかりさせて拂ふものも碌に拂はないで、しまひに突つ放されるだらうと、まり子は空つ風の中に出て行つた。

薄い黄に濁つた町なみにときどき硝子のやうに光つた風が、凍みをつきとほしては過ぎた。芝橋を渡ると葬花を積んだ一臺のリヤカーが、あまりに積みすぎた造花のかさばつた荷を危く吹き倒されさうになり、頭の大きい背の低い男が荷物に片手を支へ、やつと橋を渡つた袂でまり子と擦れちがひになつた。まり子は何氣なく造花の

山を見上げ、また、何気なくリヤカーを曳く男の顔を見た。男の方もこれまた行きずりのまままり子を見たのだ。まり子ぢやないか、男はさういふと踏み止つたまり子の方に、歩道の端にリヤカーを片よせるやうに近づいて行つた。處を明さないものだから尋ねて行きやうもない、一體何處にゐるんだ。男はまり子の扮装を靴から髪かたちまで、無遠慮といふよりもつとしたしさうにじろじろ眼でさぐつた。まり子の顔いろにある不快さは少しもかくされずに、^し顰めつらのまま唇をふくらがしていつた。「あひかはらず宿なしだわ。」

「うそ、そんな立派な恰好をしてゐてさ、宿なしもないもんだ。」

「これがもとでなんだもの、兄さんはやはり葬式屋なの、似合ふわ。」

「何か食はうか。」

「早く行つてよ、通行人が見てゐるぢやないの、わたくし失禮するわよ。」

まり子は冷然と男のそばをはなれると、何かいふ聲を碌に聞かないで歩いて行つた。濱松町二丁目にあることは知つてゐたが、もう二年の間往來もせず勿論處は明さなかつた。處を明せばやつて来るだらうし、遣つて來れ

ばすぐ素姓が分るのだ。おなじ兄妹でも、この兄はただ言ひ付けられたことばかりしか出來ないから、いくら變へて見ても地につく仕事はなかつた。だから造花はこびや、葬祭の壇ごしらへや急場の使走りにしか役立たなかつた。勿論、まり子はこんな兄の徳三なぞ人間のうにかぞへてゐないが、それでも馬鹿は馬鹿なりで兄顔をして會へばまり子と呼ばしにするのが、可笑しかつた。それでも氣になつて振りかへるとまだリヤカーを休めてゐて、まり子が振りかへつたのをきつかけに何やら呼び立てると、リヤカーを置いたまま追駈けて來た。馬鹿の本性といふものはあんなものか知らと、まり子は足をとめないで行つた。こんどは何時會へるか分らないから假りの處でもいいから手紙の届先を知つて置きたいといつた。「こまるわ、追つかけて來たりなんかしてさ。」

まり子はどんどん歩いて行き、歸つて頂戴つたらと、低い厭さうな聲でいつた。徳三はリヤカーの方をちよいちよい見ながら、立つたまま歩道にのこされてゐた。これだけのことで混亂された馬鹿者の顔いろには、どこまで行つても取りまとめられない狼狽があるだけだつた。徳三はリヤカーをもとどほり車道に引き出すと、とぼとぼと引いて行つた。まり子が二度目に振り返つた時は、

くるまや電車のおひだに紛れこんだ徳三のリヤカーは、まるでおもちゃのくるまのやうに小さく縮んで見えた。誰一人としてこんな馬鹿の兄があることを知らない世間も、案外あまいものだが、まり子が町や電車の中でこの兄と不意にあつたりして、その體裁をどういふふうに着ふかに何時も神經をつかつたが、もう二度と口も利きたくなければ會ひたくもなかつた。あんな碌でなしの兄が兄といふ名乗りを持つてゐることに、まり子は不自然さを感じてゐるくらゐだつた。

まり子は低い海邊に近い裏通りにはいると、そのまま通ひなれたやうな小路の奥の二階家の一軒の格子戸をあけたが、階下の人も留守らしく誰も出て來なかつた。まり子はだまつて玄關の土間からすぐ登れるやうになつてゐる梯子段を、みしみしゆつくりと登つて行つた。

僅か三疊の部屋にある不相應な椅子と卓の外には、おこしかけた炭火に藥鑪がかけてゐるきりだつた。この小路裏の二階にだまつて上りこんだまり子は、三尺の梯子段の踊り場で、窓の外にある洗面器をとり出すと藥鑪のぬるい湯で、丁寧に顔をあらつた。洗面器のなかは鼠黄ににごつた、女らしい匂ひのよごれ水が曇天のやうに重く見えた。その水をそのまま窓の一尺縁に出して置

いて、まり子は卓の上にあつた煙草をふかしはじめた。小時すると梯子段に足音がして久坂が戻つて來た。久坂といふ男はまり子を見ると、あ、君か、ぢや、ちよつと行つて來るといつてまた梯子段を下りて行つた。まり子は久坂の顔を眼で笑つてみせただけであつた。しじゅう人を訪ねるくせのあるまり子は紹介されなくとも、再度もあへばもうその人をたづねるが、それも行きあたりばつたりで、まるで人にけじめをつけなかつた。まり子は人をたづねることで自分を誤魔化してゐるわけではないが、なにかが必要であるらしい彼女はしぜんに彼方此方のアパートに坐りこんで、間もなく去つた。案外、くだらない人間でも、それに區別をつけなくて尋ねて行くのだ。だから半年でも一年でも行かなくなると、何處に何をしてゐるか判らなかつた。勿論、彼女は自分の處を知らせることはしない、誰も知らないし知ることにも出來なかつた。間もなく久坂はかへつてくると夕食の支度をしはじめた。果物とかパンとか干物をととのへてゐるあひだにも、まり子は手づたふといふことをしない。彼女は面白くもなさきうに久坂の動いてゐるのを見てゐるだけだが、久坂もべつに手づたつてくれとはいはなかつた。今夜あとで少し歩きませんかといふ言葉づかひから、ま

り子とどれだけも度重ねた訪問をうけてゐないことが分つた。そしてまり子は今夜はこれから用事があつて歩きに出るなんて暢氣なことはしてゐられないと、冷然と、まり子らしく答へた。ちや送つて行かう、送るくらゐならいいでせうといふと、送るくらゐならいいわとまり子は久坂といふ男なぞ、すこしも眼中に置いてないふうであつた。こんなふうにしてまり子は彼方此方うろ付いてゐるのだらうかと、人びとはそのまり子の本性をつきとめようとするかも知れぬ。しかしまり子には安井のちぢいがあるからそんな必要はないはずだ、すくなくとも去年くらゐまではちぢいは上景氣であり、まり子のことだから抜目なく立廻つてゐたであらうから、彼方此方うろ付いて歩く必要はないはずだ、それなのに、まり子はやつと二三度會つただけの、あるひはただ一度きりの紹介があつただけですぐ人を訪ねてゆくのである。ひと頻りはやつた持ち廻りの自分を話しつづけるわけでもなかつた、金のある男をさがしてゐるわけでもない。では一人でちつとしてゐられないたちなのか、そんなたちだからつい人を訪ねて見たくなるのかといへば、ああいふ冷淡非情な女にはそんな生やさしいところなぞ微塵もなかつた。しつこいことで厚面ましさを喪つた安井のちいさん

が、煩さくかかつて來ても、まり子にそんな氣が少しもないときにはどんな些細なことでも、ゆるぎなかつた。その非情さは見ただけで何も彼も興繆めるつべたいものであるが、しかし、取りやうによつては、女がなにもさせないでゐる突つ張つたあをじろいものは、それだけで立派さのある性慾の向側につきぬけてゐて、目のさめるやうにいらいらした美しいものであつた。安井のちいさんはそんなことを知つてゐるかどうかは分らないし、いくら、まり子でも、其處まで見すかしてゐる冷酷非情さがあるかないか頗る疑問であつた。それらは偶然のことならに属する。揉みにもんだあげくに辿りつくやうなそんなものは、そのまま大抵もみ消されようとするものであるが、非常に聰明なそのみちにばかり生きてゐる或る種類の人間だけに、たまに、いや、さらにそのいづみにゆあみ出来るのである。だからまり子はどうにも仕様のない片付けにくいときには、自分でも憫れはてたやうに、そつとスカートの端をつまんでこれをめくり、ふたがはから傾斜を下の方からゆつくりと、その頂にむかつて盛りあげた片膝を見せ、小面憎さうにこつともしない顔つきを打ち當てるやうにしていた。

「これだけあればいいでせう。」